

中央アジアのタタール人 —第1章 中央アジアのタタール人の活動—

リナット・シガブディノフ (著)

高橋 巖根 (訳・解説)

解説：ここに訳出したのは、ウズベキスタンのタタール人歴史家リナット・シガブディノフによる『中央アジアのタタール人』の第1章である。『中央アジアのタタール人』の原著はロシア語で書かれているが、本翻訳のために書き下ろされたものであるので原語では未出版である。シガブディノフは、ウズベキスタン歴史学界の一翼を担う中堅の歴史家であり、本来の専門であるバシュキール人活動家ザキ・ヴェリディ・トガンの研究をはじめ、19世紀から20世紀初頭にかけてのロシア・中央アジアにおけるイスラーム改革主義運動や、自らの出身であるタタール民族の歴史・文化などを研究してきた。

高橋とは、2009年ごろから共同で、中央アジアのタタール・ディアスポラの調査を行っている（2009-10年には三菱財団人文科学助成を受けて調査を行った）、この翻訳はその最初の成果の一部である。「タタール人」とは一般に、13世紀に起きたモンゴル帝国のロシア侵略に伴い、西シベリアからクリミヤ半島にかけて広がったテュルク系キプチャク・グループに属する複数の民族集団（ヴォルガ・タタール、クリミヤ・タタールなど）を総称する名称である（ただし、タタール人自身の歴史解釈においては、モンゴル帝国以前の中世ブルガール王国にそのルーツを求める見解が一般的である）。本翻訳にも示された通り、中央アジアには17世紀ごろから進出をはじめ、ロシア帝国からソビエト連邦に至る時代に同地域で支配的な位置を占めたロシア人と現地民族との間を媒介する役割を果たした。現在も、人口としては少数ながら、中央アジア各国に居住している。

本翻訳のロシア語原稿は現在、第4章まで完成していて、さらにいくつかの章が追加される予定である。日本語の翻訳としては、本学紀要の今後の号に継続的に発表していくことにしている。本翻訳の内容は、ロシア・中央アジアの地理や歴史に通じていない一般の読者（あるいは、専門外の研究者）にとっては馴染みのないものであるかもしれない。その点を考慮し、全ての章を翻訳し終えた際に、改めて詳細な解説を加えようと考えている。また、本章の参考文献リストも、全章翻訳後に一括して示すこととしたい。

第1章 中央アジアにおけるタタール人の活動

今日の中央アジアにあたるトルキスタン地方にタタール人が訪れるようになったのは、ロシアによる征服以前のことである。17世紀から18世紀にかけて、すでにタタール人は、近隣アジアの国々のみならず、遠く東アジア諸国との関係においても、ロシアに対して多くの便宜を図ってきた。タタール人がロシア国家に奉仕していたおかげで、ロシア政府は優れた通訳を確保することができた。タタール語は一時期、ロシアとペルシアの間での外交用言語でもあった。

タタール人は外交団に通訳として従っただけではなく、政府のあらゆる仕事をこなしていた。例えば1675年、キリスト教に改宗したペルシア人のヴァシリー・アレクサンドロヴィチ・ダウドフとカザン系タタール人のムハンマド＝ユスフ・カシモフがブハラ・ハン国大使のインド行に同行したが、その時のカシモフの任務は「インドに至る道のどこに砂漠があり、川が流れ、山が立ちほだかるのか」(Bartol'd 1925: 180)を突き止めることであった。とりわけカシモフの関心を引いたのは川の流れであり、それは川の流れがロシアの領土と貿易関係を拡げていくために大きな意味をもっていたからである。そのため、カシモフが命じられたのは、「その川がどこから発して、どのようなコースをたどっていて、流域の住民はどのような人たちであり、その地域の国家とどのように関わっているのかを探る」(Bartol'd 1925: 181)ことであった。残念ながら、この外交団に関する公式記録は失われていて、旅行にかかった費用に関する文書から旅行の様子やその成果がうかがわれるのみとなっている。

タタール人のムルザ・テルケレフ(訳注:ムルザはタタール人貴族の称号)はロシア政府から派遣され、ロシア政府への臣従の誓いを受け取るために、1731年から1733年にかけての2年間をカザフ族の小ジュズ(訳注:カザフ族の3つの主要部族の一つ)のハーンであったアブル・ハイルのもとで過ごした。小ジュズの人びとはハーンが行った約束に縛られるつもりはないと考えていたので、この任務はなかなか困難であった。結局、テルケレフはハーンとだけでなく、人びとも交渉を行う必要に迫られた。この交渉において、テルケレフは優れた外交手腕を発揮し、ついに目的を達成することができた。アブル・ハイルを戴く小ジュズばかりではなく、シェミヤカ・ハーンが治める中ジュズの一部までもが臣従の誓いに同意したのだった。

1780-1781年には、通訳のメンディヤル・ベクチュリンが同行した外交団がブハラを訪れ、いくばくかの興味深い情報を集めている。タタール人通訳のユスフ・イジュブラトフは、ラシウトでデルベントの歴史に関するペルシア語の著作を翻訳しているが、原書は後に失われた。この翻訳は出版するために準備されたもののだが、手稿のまま残されている。

タタール商人は、中央アジアの商業資本のかなりの部分を代表し、対外国境貿易や国

内貿易においても相当部分を占める大きな役割を果たしていた。つまり、タタール商人は、中央アジアの隅々に至るまでロシア権益の確かな基礎を築いたのである。中央アジア方面での貿易を最初に始めたのは、オレンブルク出身のアブドゥッラ・ハヤリンであった。彼は1750年に、商売仲間とともに3千ルーブルを費やして、最初の本格的なキャラバンを仕立てている。そこには、オレンブルクに来ていたヒヴァ大使のシルベクも同行していた。キャラバン一行が利益を上げて戻ってくると、アブドゥッラ・ハヤリンは5千ルーブル相当の荷を積んだ次のキャラバンを派遣した。ハヤリンの手代は、ブハラ、バルフ、バダフシャン、あるいは可能であれば、カブールまで到達するように命じられていた。チュグチャク（訳注：中国名は塔城、ウイグル名はチョチュク）からの貿易ルートが開けたのは、トロイツクのタタール商人たちがもつ進取の気性によるものである。トロイツクのタタール人たちが組織しロシアに茶をもたらしたキャラバンは、チュグチャクからばかりではなくクルジャ（訳注：中国名は伊寧、ウイグル名はグルジャ）からも来ていた。最初のキャラバンがタタール商人たちによってトロイツクからチュグチャクに派遣されたのは、1844年のことであった。キャラバンを組織したのは資本力の乏しい商人たちであり、キャラバンは遠征の形をとって行われた。キャラバンは、それぞれ14ブード（訳注：約230キロ）の荷を積んだ70頭の駱駝と15頭の馬と12人の働き手から成っていた。最初の試みが成功を収めると、以後、遠征隊は毎年、トロイツクに運んでくる茶の量を増やした（Saifi 1930: 20）。

19世紀初頭、タタール商人による貿易活動は、中央アジアに対するアクセスが容易であったため、帝政ロシア政府によってあらゆる手を尽くして奨励されていた。当時、「ブハル・ユルトゥチ」と呼ばれるブハラからの商品を専門に扱う商人すら存在した。しかし、タタール商人と関係があったのはブハラだけではなく、ルィブシュキンによると、「裕福なタタール人の一部は、ブハラ、ヒヴァ、ペルシア、トルキスタンで取引を行っていた」（Rybushkin 1848-49: 87）。

このように、中央アジアへの道はタタール人にとってお馴染みのものであった。だから多くのタタール人が、カザン地域で行われていた強制的なキリスト教への改宗を逃れて、中央アジアにやってきたのだった。これが、最初の本格的な中央アジアへのタタール移民の波であった。タタール移民の次の波は、エカチェリーナ2世の時代に起こった。この時代には、プガチョフの反乱との関連でタタール人に対する宗教政策が転換を余儀なくされ、彼らをカザフ草原に住む遊牧民の「教化」に当たらせるということが行われた。モスクや宗教学校の建設、イスラームに関する宗教文献の出版、カザン系タタール出身のムッラー（訳注：イスラームの法や教義に通じたモスクの宗教的指導者）や教師の養成、貿易が奨励された。時が経つにつれて、コクシェタウ、パヴロダール、セミパラチンスクなどの町には、相当数の人口をもつタタール系コミュニティが形成された。

クリミア戦争の時期には、カザン系タタール移民の新しい爆発的な波が中央アジアに

押し寄せた。中央アジアに来た者の中には、戦争に召集されたがトルコで戦うのを嫌って逃れて来た者の他にも、帝政ロシア政府の抑圧を逃れて来た革命派のタタール人たちもいた。中央アジアに来たタタール人の多くが、宗教教育の中心として古くからイスラーム世界で有名であったブハラやサマルカンドのマドラサ（宗教学校）の学生として来た人びとであった。バルトリドの見解によると、ロシアによるトルキスタンの占領までに約5千人のタタール人が来住していた（Bartol'd 1927: 158）。

周知のように、トルキスタン地方はかねてから帝政ロシア政府の注目を集めていた。コステンコによると、「中央アジアは古くからわれわれにとって、ある種のエルドラド——抗し難いまでにわれわれを深奥にいざなう秘境と思われてきた。ヤルケンドの豊かな金鉱に関する情報を得て、ピョートル大帝は執拗な探査を行わせた」（Kostenko 1871: 200）。しかし、金鉱がロシアを惹きつけたというだけではなく、「ロシアにとっての中央アジア貿易の重要性もまた疑いもない事実であった」（Kostenko 1871: 259）。中央アジアのロシア領への編入は、コステンコによれば二重の意味をもっていた。一つには、「中央アジアはロシアにとって両替市場の役割を果たしていた」。もう一つには、この地域は「アジアの大国である中国とインドへの貿易経路であった」（Kostenko 1871: 348）。19世紀半ば、ロシアは、安い原料・日用品市場の獲得と影響圏の拡大を理由として中央アジアへの侵略を開始した。1865年5月17日にタシケントが陥落し、翌年にはブハラ・ハン国の領土であったフジャンド、ウラチュベ（訳注：現イスタラフシャン）、ジザクが、1868年5月2日にはサマルカンドがロシアの手に落ちた。このようにして、1864年から1868年にかけて中央アジアの二つのハン国であるコーカンドとブハラが征服されたが、この国々には形式的には独立国の面目を保った。征服された地域からは、タシケントを中心都市とするトルキスタン地方が形成された。トルキスタン地方は、次の5州に区分された：シルダリヤ州、フェルガナ州、サマルカンド州、セミレチエ州、ザカスピ州である（後2者は、19世紀末になってから同地方に編入された）。各州は、ザカスピ州を除いて（同州には州知事が配置された）、独立性のある軍総督によって運営された。

トルキスタンには、この地に派遣されたロシア部隊とともに、多くのタタール人がやってきた、ある者は兵士や将校として、他の者は通訳や酒保商人（訳注：兵営内で日用品や飲食物などを扱う商人）として（Gubaeva 1991: 111）。ロシア本土からトルキスタン地方へのタタール住民の新しい波は、中央アジアのロシア帝国への編入の後に起こった。トルキスタン地方の諸都市や各地方には、19世紀末までにかかなりの数のタタール人が住み着いていた。19世紀の終わりまでに、中央アジア地域には全部で528万983人の人びとが住んでいた（ロシア帝国国勢調査1）。これに対し、この地域のタタール人の人口は18432人であり、これは全人口の0.35%に相当した（ロシア帝国国勢調査2）。

この地域のタタール人のうち、かなりの部分は都市に居住していて、その数は1万1

千609人、中央アジアの全タタール人口のほぼ63%に相当した（ロシア帝国国勢調査2）。

1千人以上のタタール人が住む都市は、次の3つにとどまった：タシケント、ヴェルヌイ（訳注：現アルマトゥ）、アシュハバード（訳注：現アシュガバート）。しかしながら忘れてはならないのは、中央アジアのほかの都市においてもタタール人口は急速に増えていたという事実である。たとえば、コパルには961人が、レプシンスクには900人が住んでいた。さらには、それぞれ500人以上がカザリンスク、プルジェヴァルスク（訳注：現カラコル）、トゥルケスタンに住んでいた（ロシア帝国国勢調査2）。

周知のように、ある程度の社会経済的・政治的な安定性が移民のための重要な条件の一つである。これに対し、トルキスタン地方のロシアへの編入は1890年代になってようやく完了したため、タタール人の人口はセラフス、テジェント、カアフカのような（トルクメニスタンの）都市にはさして大きくなかった。少なからぬ数のタタール人口が、旧ブハラ・ハン国領でロシア帝国に編入されたフジャンド、ウラチュベ、ジザクのような都市に住んでいた（当時、ブハラ・ハン国は形式的には独立国とされていたが、その独立性はかなり低いものであった）。

当然ながら、安定性以外の理由によってもさまざまな移民の波が押し寄せてきた。社会経済的な理由としては、貿易ルートの開拓、商業センターの構築、産業の発展など、行政的な理由としては、軍事的要塞や屯田隊には基本的にロシア系の人間が配置されていたことなどが挙げられる（訳注：これは、移民を妨げるという意味でのマイナスの理由である）。たとえば、アレクサンドロフスクの砦には、たった18人のタタール人しか住んでいなかった（うち男11人、女7人）。タタール移民の波に大きな影響を与えたのは、新しく編入された領土に対してロシア系住民を植民させようとした帝政ロシア政府の植民地政策であった。この目的のために決められたのが、「正教を信じるロシア系住民にのみ」トルキスタンに対する移住の許可を付与するという決定であった（ウズベキスタン中央文書館資料1）。従って、19世紀末までのトルキスタン地方におけるロシア系住民の数は、タタール人の数を上回っていた。たとえば、シルダリヤ州ではロシア系は全人口の3%、タタール人は0.3%を占め、サマルカンド州ではロシア系が10.4%、タタール人が0.3%であった。

トルキスタンが植民地化された後、現地政府には「帝国の各地から、兵役義務を逃れてトルキスタンにやって来る者の搜索と送還の要求」（ウズベキスタン中央文書館資料2）が突きつけられた。1868年5月3日付けの報告でトルキスタン総督補佐官のゴムジンは、「現地住民の安寧」のためロシツキー五等官が「タシケント市がロシアに対して臣従の誓いを立てるまで、ロシア本土から出国し同市に移住した全ての者の追跡を行わないことの許可」（ウズベキスタン中央文書館資料3）を申請した。後になって（1871年6月6日に）、トルキスタン総督のカウフマンは国防省に宛てて、トルキスタン地方では脱走者の大半は、ロシアによる植民地化以前に移住してきたタタール人であると

書いている。「この地方における新しい秩序が確立されれば、このようにしてこの地に残った人びとは害とならないばかりではなく、逆に、ロシアの製造業について知っていることで、彼らと付き合いのある現地人に対する良き知識の伝道者ともなる」(ウズベキスタン中央文書館資料4)。彼はこうも書いている、「移住者のこうした特質を理由に、私は皇帝陛下に対し、ロシアから逃走してタシケント市やトルキスタン地方の他の新都市に移住した全ての者の追跡を、これらの都市がロシアへの臣従を誓う時まで停止することへの承諾を請願しようと思う」。その承諾は、1871年7月29日に与えられた(ウズベキスタン中央文書館資料5)。タタール人は、他の移民同様、兵役の免除、いくつかの役職への選出、さまざまな職業団体への加盟、財産の自由など、現地人がもっていた全ての権利を保証された(ウズベキスタン中央文書館資料6)。

タタール人は、トルキスタン地方の事実上すべての経済分野で活躍していた。彼らは、ロシアの行政組織における通訳として、探検隊の案内人やリーダーとして、租税徴収人として、郷長として働いた。初期のタタール人の中には、この地方の工場、石油採掘現場、鉱山で働いた者もいた。タタール人は、この地域に住む半遊牧民や定住民との商業的なコンタクトを強化する上で大きな役割を果たした。バルトリドによれば、1872年の時点でブハラでは、ロシア製品が売られていながらロシア商人の姿は見られず、「ブハラにおいてロシア製品を扱う取引はすべて、現地人かタタール人が行っていた」(Bartol'd 1927: 252)。

セミレチエ州からの主要な輸出品目は、ロシアだけではなく他の国においても売れ筋の商品であった羊と山羊の皮であった。外国からの主要な輸入品目の一つが茶であった。茶の主な輸入業者の一人が、タタール人のチャヌシェフであった。チャヌシェフの手代は漢口(訳注: 武漢市北西部)で茶を、1899年には5万ルーブル分、1900年には9万8千766ルーブル分を仕入れている(ちなみに、ロシア市場に入ってきた茶は、1899年に5万4千450ルーブル分、1900年には17万5千612ルーブル分であった)(カレンダー1901: 3, 16)。

シルダリヤ州のタタール商人は、ヴォルガ地域のラシヤ縮絨工場に羊毛を提供していた(訳注:「縮絨(しゅくじゅう)」とは、毛織物の仕上げの過程で、組織を緻密にし、また毛端を絡ませてフェルト状にすること)。同州のシュムケントから運ばれたのは羊毛のみならず、モスクワ向けの子羊の皮、外国工場向けの獣皮、ソーセージ工場や楽器工場向けの獣腸、全世界向けのサントニン(回虫駆除剤)なども含まれていた。ゲイエルによると、「貿易のあらゆる分野は、基本的にカザン系タタール人の手に握られていた」(Geier 1909: 308)。

19世紀後半、中央アジア貿易は、カザン、オレンブルク、ウファのような商業センターに握られていた。カザン郡のメンゲリヤアトナのようないくつかの村でさえ、中央アジアへの輸出で成り立っていた。中央アジアとの貿易に従事したのは、トロイツク

出身のヤウシェフ家、オレンブルク出身のフサイノフ家、サリムジャノフ家の商人たち、カザン出身のカリモフ家であった。

トルキスタンにおける貿易は実際、かなりの部分がタタール人によって占められていた(5446人, 29.5%) (ロシア帝国国勢調査3)。彼らの中には、ムハンマド・アフメトジャノビチ・バキロフ、アブドゥルバリ・アフメトジャノビチ・ヤウシェフ、ムルタザ・アブドゥラフマノビチ・イブラギモフ、ガゼトウツラ・バヤジトフや、タシケントの女商人であるシリンバナ・ヒサムトジノヴナ・フサイノヴァとサイダ・ムハメドヴナ・フサイノヴァなど、第一ギルド(訳注:ロシアには、資本量に応じて分けられた3つのギルドが存在した。第一ギルドは最も資本量の多い商人から構成され、第二ギルドはそれに次いだ)に属する商人たちがいた。これに対し、多くの商人たちは第二ギルドに属していた。公文書資料によると、1895年にはタシケント一か所だけで、30人以上の第二ギルド所属のタタール商人が活動していた。例えば、ユスブ・ウスマノヴィチ・ビシェエフ、イズマイル・ファトクツリノビチ・ダラトカジン、アブドゥラ・ムルタジン、ムハメト・ラフモノビチ・ダウトフ、女商人としては、ビビガイシャ・アブドゥルカリモヴナ・アダガモヴァ、ビベイヌシュマ・ハサノヴナ・ハリロヴァ、ザリファ・セイトヴナ・ファツビャソヴァなど(ウズベキスタン中央文書館資料7)。

19世紀末におけるトルキスタン地方の工業分野では、この地方の全タタール人口の16.1%にあたる2832人が働いていた(ロシア帝国国勢調査4)。トルキスタンのタタール人の中には、かなり大規模な工場の所有者もいた。たとえば、サリホフには、ミタン郷チャドル村に2台のねじ式圧搾機と4台の綿繰り機械を備えた灯油で動く綿洗浄工場があった(Geier 1909: 242)。ヤウシェフ兄弟の会社にも綿洗浄施設があったが、それはトルキスタン地方で数少ない大規模な事業の一つであった(トルキスタン集成1)。ヤウシェフ家は、1890年代にはたった一つの綿洗浄工場(1888年設立)をもっていて、そこでは20人の労働者が働いているだけであったが、20世紀初頭に入ると、タシケント市と隣接するケレス市にそれぞれ事務所を構え、綿洗浄工場のほか、ケレスの綿工場、2か所の店舗をもち、300人以上の従業員や労働者を抱えるまでになった(ウズベキスタン中央文書館資料8)。

19世紀末トルキスタンの農業分野では、この地方の全タタール人口の28.4%にあたる4987人が働いていた(ロシア帝国国勢調査5)。セミレチエ州のファティフ・スレイマノフは、自らの養馬場を所有していた。彼は、この地の馬の品種改良を手がけ、馬の品評会で数多くの受賞歴を誇るような相当の成果をあげていた先駆者のひとりであった(ウズベキスタン中央文書館資料9)。この養馬場で飼育された馬は、トルキスタン軍管区の騎兵隊や砲兵隊に採用された。ファティフ・スレイマノフの事業は、コサックから借りたニコラエフスキーの大村でも展開された。そこでは、187デシャチーナ(訳注:約204ヘクタール)の土地に、小麦、カラス麦、大麦が作られた。オスタシュキン州の

軍総督をつとめた人物によると、「彼の養馬事業はうまくいっているばかりか、模範的ですらあった」（ウズベキスタン中央文書館資料10）。

ロシア人の到来以前に、中央アジアで最初にジャガイモを栽培した人たちの中には、タタール人たちがいた。バルトリドの見解によると、農業分野においてジャガイモの栽培は「ヨーロッパ文化の影響が最も顕著に表れたものの一つ」であった（Bartol'd 1927: 158）。バルトリドはここで、ノガイ・クルガン村（タシケント市南部のチナズ方面に行く街道沿いにあり、トルキスタンでは「ノガイ」と呼ばれるヴォルガ・タタールによって開かれた）に言及している。同時代の証言によると、この村は1866年には「この地方ではジャガイモが栽培される唯一の場所」として知られていた（Bartol'd 1927: 105）。この事実は「トルキスタンのトルコ系イスラーム教徒の間にヨーロッパ文化を普及させるというタタール人の役割が、ロシアによる併合以前から始まっていたということの証拠となるかもしれない」（Bartol'd 1927: 106）。

タタール人は、トルキスタンの住民に養蜂の具体的なやり方を教えた（ウズベキスタン中央文書館資料11）。ゲイエルによれば、タシケント郡における養蜂は、主として山岳地帯でタタール人やタジク人が行っていた。1860年代にはすでに、カウフマン総督の命令で、ブルチムツラー村のタタール人によって養蜂が始められていた。養蜂はここから、チャトカル川流域に広がっていった（Geier 1909: 93）。

地域産業の発展に与えたタタール人の影響については、ゲイエルが織工業の事例を挙げて記述している。この地域の織工とは、住民にとって欠くことのできない衣服の一つであるローブを作る人たちであった。織工のうち、女たちは手縫いでローブを拵え、男たちは裁断と販売を担当した。ゲイエルによれば、「このような状況下、今から25年前のタシケントに、織工の世界に革命的な変化をもたらした一人のタタール人が現れた」。革命的变化とはこの男が織機を導入し、それによってローブを織るようになったことであり、「しばらくすると同じタタールの中から…模倣者が現れた」（Geier 1909: 108-109）。このようにして、織機は手工業の分野を侵蝕していった。ゲイエル曰く、地域住民が織機を採用すると、労働者の構成に変化が生じ、「機械の導入によりローブ生産における女性の役割は相当程度狭まり、そこで圧倒的な意味をもつようになったのは男性の役割であった」（Geier 1909: 108-109）。

地域経済におけるタタール人の影響力は、1880年代にはロシアによる統治を妨げるようになっていた。タタール人は、並々ならぬ競争相手として、そしてトルキスタンにおける好ましからざる要素として捉えられるようになっていた。地域経済の各分野に根を下ろしたタタール人は、ロシア人にとって油断ならない競争相手となり始めていた。

シルダリヤ州の軍総督は1901年、内務省警察局に対する秘密報告の中で、同州が久しくヨーロッパ・ロシア東部から来たタタール人たちの貿易活動の拠点となっていると指摘している。タタール商人は地域住民から多種多様な原材料を買い付ける一方で、彼ら

に多種多様な工業製品を売っている。軍総督によれば、この取引は「多くの利益を生んでいる。しかもそれを享受しているのは、地元の人たちから同じトルコ系として、同じイスラーム教徒として尊敬されている人たちであり、彼らは容易に貿易の仲介者と宗教的指導者を兼ねることができるのだ」（ウズベキスタン中央文書館資料12）。軍総督の見解によると、この地域が植民地化されて以降、タタールの地域住民に対する影響力は一層強くなっていて、極めて速やかに草原地域における経済的支配者となったばかりではなく、タタール文化の体現者ともなった。だからこそ地域の行政府は、「タタールの活動の自由を制限するあらゆる手段を講じたのであった」（ウズベキスタン中央文書館資料13）。

タタール人にとって何よりも深刻な制限となったのは、トルキスタン地方における住民登録の問題であった。タタール人は都市部・農村部のいずれにも登録することができたが、それは警察機関がその者の思想的穏健性を示す「証明書」を与えた場合のみであった。この制限を逃れようとすれば相当な額の賄賂の力を借りることになるため、地域の役人たちがタタール人の住民登録に対して意図的に様ざまな障害をうず高く積み上げることもよく行われた。

よく知られているように、1886年に発布された「トルキスタン地方行政条例」の第262条によれば、「ロシア系ではない者、並びに先住民を除く非キリスト教徒が、トルキスタン地方において土地、及び不動産全般を取得することは禁止される」（Tardzheman 1886）。この条項は、タタール、バシユキールなど、非ロシア系・非キリスト教徒でかつ地域住民には属さない移民たちに適用された。しかも、この条例の第207条によって、不動産に関するあらゆる行為、とくに公証人を通じて住居に関する複数年の賃貸契約を結ぶことが禁じられた。このようにして、ロシア人の到来以後にトルキスタン地方に移住してきたタタール人たちは、地域における土地、及び不動産全般の取得権を奪われたのだった。時間が経つにつれて、この諸制限は、ロシア到来以前に移住していたタタール人たちの感じるどころともなっていた。彼らは、ロシア到来以前に移住したことを示しながら、地域住民への所属を証明しなければならなかった。

ロシア国防相あてには、数多くの請願が寄せられた。しかしながら、個々人による私的な請願がある程度、肯定的な許可を得たとしても、全てのタタール人に対する制限の撤廃に関する問題に言及した請願は、決まって厳しい拒否に遭うのだった。

過酷な条件下でトルキスタン地方に住むタタール人は、それに適応することを強いられていた。彼らは、多くの難事とはほとんど関係のない名義人を探し、彼らの名を使って不動産を取得していた。

19世紀末から20世紀初めにかけて、覚醒しつつあったロシアのイスラーム世界では、進展する資本主義社会と関連した新しい思想が台頭していた。そこで喫緊の課題となったのは、貿易・産業分野を指導することのできる民族指導層と世俗的知識階級の育成で

あった。指導者養成の問題は何よりも、教育の問題と結びついていた。最も望ましい選択肢があるとすれば、イスラームの宗教学校に宗教教育を任せ、それとは独立した世俗的な学校を開設することであったであろう。しかしながら、皇帝政府は世俗的な学校の開設に対し公的な許可を与えなかったし、にも関わらず非公式的に開かれた教育機関も通常、ある程度の時期が過ぎると、地域の行政機関によって閉鎖されるのがおちだった。従って、こうした条件下における最適の選択肢は、ガスプリンスキーが主張したようなイスラーム宗教学校の改革であった。この改革の最重要点は、宗教学校の教育課程の中に、タタール語による一般教養と基礎的な科学（地理・歴史、自然科学、算数および平面幾何学に関する概説、教育学の基礎、ロシアの法律に関する概論）に関する教科を導入することであった（Gasprinskii 1881: 40）。

バルトリドの見解によれば、トルキスタン地方における新方式学校の創設者となった者は「ほぼ、ロシア本土から来たタタール人で占められていた」（Bartol'd 1927: 136）。バルトリド曰く、皇帝政府の目から見れば、イスラーム文化は滅びゆくことを運命づけられていた。しかしながら「程なくして、現実がこの予想を覆すことになった。トルキスタンはヴォルガ系タタール人の来住地となり、この地域の良好な環境が、民族的・宗教的な土台を損なうことなく現代社会の要求に対応したイスラーム学校に関する改革思想を育んだのだった」（Bartol'd 1911: 252）。

新方式の学校は、短期間のうちに地域住民の共感を得た。有名な宣教師ボブロニコフによれば、カザン系タタール人が開いたこれらの学校は「大きな成功を収め、生徒たちで溢れていた」（Bobrovnikov 1913: 80）。トルキスタン地方における新方式学校の正確な数はわからない。この学校は、ある程度の規模をもつ集落ならば、ほぼどこでも開設されていた。また、男子校・女子校ともにあり、女子校ではタタール人の女性教師が教鞭をとっていた。

バルトリド曰く、19世紀末から20世紀初頭にかけて「タタール人は、イスラーム教徒に対するヨーロッパ流教育の導入、はたまたイスラーム地域へのヨーロッパ文化の普及全般に関して、ロシア人の競争者であった。この競争は次第に激しくなっていったが、ロシア人の注意を引いたのはかなりの規模に達した場合に限られていた」（Bobrovnikov 1913: 136）。

タタール人の啓蒙活動を抑えるためには、ありとあらゆる手段が提唱された。時に、トルキスタン地方におけるタタール教育の禁止が言及されることもあった。

1911年にトルキスタンで、マクタブ（初等宗教学校）の教師は地域民族の出身でなければならぬという規定が定められた。同規定によれば、「サルト出身の教師はカザフの生徒を教えるはならず、タタール出身の教師はサルトの生徒を教えるはならない」（Bobrovnikov 1913: 77）（訳注：「サルト」とは、帝政ロシア時代に中央アジアの定住民を指して使われた言葉）。タタール人という「パン・イスラーム主義の唱導者」の精

力的な撲滅の動きが始まった。それがどのように行われたかについては、ボブロニコフの著作に次のような記述がある。「1910年12月28日、コーカンド市第3地区の警察署長は自らの執務室にノガイ人教師（注：ノガイはカザン系タタール人に対する中央アジアにおける呼称）を呼び、国民学校の学生監による公式規定を読みあげた。それによると、タタール人（つまり、ロシア本土から来たイスラーム教徒）は、地域のマクタブにおいて教育活動を行う権利をもっていない。マクタブで教えることができるのはサルトか、サルトの言葉を知っているロシア人だけである」（Bobrovnikov 1913: 77）。教師たちの前でこの規定を読み終えると、所長は彼らに署名を要求した。

かくして1911年1月からロシア政府の命により、タタール系のマクタブは閉鎖された。中央アジアにおけるカザン系タタール人に対する教育活動の禁止に関しては、ロシアの全てのイスラーム系出版物が次のように指摘している。タタール系マクタブの閉鎖によって、「トルキスタンの新方式学校が存在しなくなるということはなかった。禁止措置によって勉学への情熱を阻むことはできない」。これら全ての禁止措置が「目的とし得ることと言えば、サルトとタタールの一体化を防ぐという望みくらのものであったが」、それとは裏腹にこうした措置は「両者の密接な一体化を促進するであろう」（Bobrovnikov 1913: 79）。

地域の学校で教えることを禁止されて、タタール人教師たちにできたのはタタール系学校で働くことだけであった。しかしながら、多くのタタール系学校で学んでいたのは、タタール人の子弟だけではなかった。例えば、1913年にブルジェヴァルスクのタタール系モスクに併設された新方式のマクタブでは、タタール人男子生徒77名、カザフ人28名、ドゥンガン（訳注：回族のこと）とサルト24名が学んでいた（ウズベキスタン中央文書館資料14）。ヴェルスイ市にあった女子向けの新方式マクタブでは90名が学んでいたが、69名がタタール、9名がキルギス、同じく9名がサルト、3名がその他のイスラーム系民族であった（ウズベキスタン中央文書館資料15）。

トルキスタン総督が内務省に宛てて書いたものによると、皇帝政府を悩ましていたのは新方式学校の普及だけではなく、「それ以外にもタタール人の中には新しい動きが見られるようになってきている。それは、多くの都市に、タタール系の慈善団体や一般向けの読書室、文学サークルを創設しようという試みである…」（ウズベキスタン中央文書館資料16）。

1908年、タシケント市のタタール知識人の間で、「ヨーロッパ式劇場の舞台でタタール語による公演を行うという考えが持ちあがった。その目的は、ヨーロッパの演劇芸術、ひいてはヨーロッパ文化全般に対するイスラーム教徒の先入観と偏見の厚い壁に風穴を空けることであった」（トルキスタン集成2）。しかし、最初の公演が実現したのは、ようやく翌1909年になってからで、場所は商業会議所の劇場であった。公演は「ベレンチェ・テアトル（最初の演劇公演）」と題して行われた。それは愉快的な喜劇で、ター

ル語的一幕物であった。公演に出演したのはアマチュアの芸術家たちであったが、ある記者が報じたところによると「公演に加わった愛好家たちは初めて劇場の舞台を踏んだにも関わらず、格別複雑でも思想的でもないこの演劇作品を一致団結して滞りなく演じ切ったのであった」（トルキスタン集成2）。

この記者は、トルキスタンにおけるタタール知識人の「高尚な志向」に基づく活動を祝福し、「その最初の成功」を喜びつつ述べている、「われわれは、かのロシア化主義者たちの危惧を全く共有しない。彼らは、タタール知識人による啓蒙活動は、パン・イスラーム主義、分離主義、その他諸々の悪の危険を孕んでいると言うのだが」（トルキスタン集成2）。

19世紀後半のトルキスタンでは人形劇も盛んであった。1890年代に人気を博した登場人物の一人が、タタールの町医者バトゥルシン博士であった。バルトリドによれば、「人形劇を含めた演劇作品は通常、断食月の夕べに上演された。断食月が冬に当たる年には、ロシア人も多く見に来たものであった」（Bartol'd 1927: 174）。1870-80年代の舞台には「ロシア人の総督や郡長までもが出演していた。これも程なくして、おそらくは当局の要請で沙汰止みになったが」（Bartol'd 1927: 174）。

タタールによる進歩的な出版物もまた、トルキスタン地域のイスラーム教徒の覚醒に影響を与えた。バルトリド曰く、「1906-08年の2年間にトルキスタンで発行されていた進歩的な日刊紙はことごとく、ヴォルガ系タタール人の手になるものであった」（Bartol'd 1927: 138）。

シルダリヤ州の軍総督が伝えるところでは、地域の出版市場では新方式の文献が大きな需要を有している。とりわけ「タルジェマン」（訳注：翻訳者の意）紙が多く定期購読者を集めているが、彼らは主として、通訳将校として公務に就いているトルキスタン在住のタタール人である。「既に定期購読している人びとの仲立ちで、タルジェマン紙は相当数のサルトたちからも定期購読を獲得している。サルトたちは紙面に目を通した後、それを他の者にあげてしまう（訳注：そのため、実際の読者数は定期購読者数よりも多いということ）」（Bartol'd 1927: 12）。タルジェマン紙以外に、トルキスタンで特に普及していたタタールの定期刊行物としては、「ユルドゥズ」、「ヴァクト」、「ウルフェト」、「イデル」などがある。

進歩的なタタールの出版物の後を追ったのは、トルキスタン地域の出版物であった。これらはほとんど全てタタール語で書かれ、「同じイスラーム教徒の間に教養を広めること」を目的としていた。ある記者が伝えるところでは、それを通じてイスラームの社会生活に関する多様な情報が伝えられたが、「タタールの編集者が伝える情報は極めて豊富であり、時には政府や地域の首長による命令に対する批判も含まれていたが、そうしたものはロシア語の出版物には見られないものである」。だが、この記者が考えるところでは、「純朴だが正しい判断力をもつ地域のイスラーム系諸民族との良好な関係も、

おそらく良い方向には転ぶまい」。なぜなら、「タタールの活動は極めて活発」で、カザフ草原を越えシル川のほとりまで達しているのだ（トルキスタン集成3）。

皇帝政府の危惧には、然るべき理由があった。政府の認識では、地域住民に対する書物やパンフレットの発行がロシア語によるものでないとすれば、それは「タタール語でなされたものであり、それらが目指すものはロシアの国益全般から大きく外れたものである」（Bartol'd 1927: 135）。シャフタフチンスキーの見解によれば、タタールの出版者が果たすべき主たる責務は、ロシア文芸に関するロシア語の文献をタタール語に翻訳することである。ロシア文芸は「当然ながら、イスラーム教徒たちに文化性を与える源とならなければならない」（トルキスタン集成4）。シャフタフチンスキーは、皇帝政府がタタール人から奪った役割が何なのかを明解に示している。「願わくば、裕福で教養高いイスラーム教徒の中からヨーロッパ思想の受容層が生まれ出でよ、——そして、ロシア国内のイスラーム教徒に対するヨーロッパ化が成功した暁には、その動きが近接するイスラーム諸国にも広まるように」（トルキスタン集成4）。

このようにして、皇帝政府はトルキスタンのタタール人からロシアの影響を広める役割を奪ったのだ。しかしながら、総じて言えば、皇帝政府の意志に反し、タタール人の活動は、地域の経済発展、並びにトルキスタンに住む諸民族の文化的な覚醒と啓蒙に貢献した。

トルキスタン社会の経済・文化生活におけるタタール人たちの積極的な参加は、一方では好ましからざる競争として、他方ではロシアにおけるイスラーム世界のさらに好ましからざる団結と強大化として捉えられていた。法的な制約は、相当程度タタール人の競争力を削ぎつつも、全体としてはトルキスタン地方の経済的・文化的発展を停滞させた。だが、見方を変えて言えば、こうした制約ゆえに、トルキスタンのタタール人たちが民族・宗教的および文化・習慣的な面でより密接に結びついていかざるを得ない条件が生まれたとも言える。それゆえ、彼らは自分たちの民族性を保持し、同化の過程に対抗することができた。総じて言えば、団結・結束・相互協力の過程を通じて、トルキスタンのタタール人たちは、法的制約にもめげずトルキスタン地方に住む諸民族の文化を豊かにしながら、地域の社会・経済生活における自らの地位を保持し続けたのである。

（続く）